第 121 回 ASC セミナー

日本アフリカ学会 関東支部 共催

事前登録こちら

「人獣共通感染症のリスクの地域社会の視点からの再考：コンゴ盆地における獣肉、人間＝動物関係、在来知識をめぐって」



2026 年 12 月 9 日（水）

場所：【Hybrid】
Onsite: 103 教室 / Online: ZoomMeeting
（東京外国語大学 研究講義棟 1F/ 府中キャンパス）

言語：英語・参加費：無料

時間：17 時 40 分～ 19 時 10 分（日本時間）

協力：総合地球環境学研究所　Fashloks プロジェクト

【講演者】ロマン・ドゥダ博士

総合地球環境学研究所・フェローシップ外国人研究員、
フランス・フランス国立科学研究センター研究員

ロマン・ドゥダ氏は、フランス国立科学研究センター（CNRS）傘下の機能・進化生態学センター（CEFE、フランス・モンペリエ）に所属する人類学および民族生態学の研究者である。同氏の研究は、中部アフリカの熱帯雨林における人間と動物の接点で見られる在来知識、慣行、価値観を明らかにするもので、特に狩猟、野生肉、人獣共通感染症（エボラ、エムポックス）に焦点を当てている。カメルーン、コンゴ共和国、コンゴ民主共和国、中央アフリカ共和国のバカ、バヤカ、トゥワ、テケのコミュニティにおいて研究を行ってきた。現在は、京都にある総合地球環境学研究所の客員研究員として、本郷峻博士が率いる FASHLOKS プロジェクトに参加している。

【要旨文】

コンゴ盆地は、狩猟やブッシュミートが世界の公衆衛生を脅かす「ホットスポット」として、しばしば描かれる。本発表では、中部アフリカの複数国でのフィールドワークに基づいて、このブッシュミートをめぐる語りとリスクの「文化化」について、人類学的な視点から考察する。その出発点となるのが、在来知識の視点である。野生動物との接触は単なる「リスクを伴う行為」ではなく、親族関係やシェアリング、そして地域社会の分類体系に刻みこまれている。森林とそこに生息する人間および非人間もまた、長期的なプロセスの産物である。つまり、植民地時代の資源搾取、森林伐採事業、都市部からの需要、経済危機などが狩猟を激化させ、土地利用を変容させ、野生生物を減少させ、地域住民の食生活を大型の狩猟対象から齧歯類へと変化させてきた。最後に、エボラやエムポックスの流行の際、人々は不運や衰退に関する独自の災因論を動員したが、これらは真剣に受け止める価値がある。人獣共通感染症のリスクは歴史的に形成され、社会的に分配されているため、疾病の発生をより深く理解するためには、在来知識に基づいた人獣共通感染症の人類学が不可欠であると論じる。

キーワード：ワン・ヘルス；社会科学；新興感染症；人と動物の関係；野生獣肉；地域社会における表象

現代アフリカ地域研究センター
African Studies Center-TUFS

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1（研究講義棟 4 階 401E-2 号室）
3-11-1 Asahicho, Fuchu, Tokyo 183-8534 Japan
(Room 401E-2, Research and Lecture Bldg.)
Email: asc@tufs.ac.jp